

公表

事業所における自己評価総括表

○事業所名	児童発達支援事業所 ハイタッチ			
○保護者評価実施期間	2025年 11月 25日		～	2025年 12月 15日
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	43	(回答者数)	35
○従業者評価実施期間	2025年 11月 25日		～	2025年 12月 15日
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	8	(回答者数)	8
○事業者向け自己評価表作成日	2025年 12月 26日			

○ 分析結果

	事業所の強み(※) だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的にやっている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	○職員一人一人が謙虚に自己の療育に関する職務能力を凝視し、子どもに寄り添い、保護者の願いを受けとめられるように働きかける姿勢を大切にすると共に、職員間の共通理解を深めること。	○限られた予算・スペースを最大限活用して子どもたちにとって魅力ある、活動意欲を高め効果のある療育の環境設定に取り組んでいる。個別活動の教材もほとんど職員の手作りで個々の子どもの課題解決に資する作品に取り組んでいる。	○療育の専門性を高めるため時間の許す限り厚労省、子ども家庭庁、及び京都市担当より発出される研修会に参加して伝達研修したり、資料等を職員会議読み合わせたりしている。時には市内の事業所との交流会に参加して当事業所の課題を客観視するよう努めている。
2	○大学で療育の課程を受講し免許を取得した療育の専門家といえる職員は常勤の指導員1名のみ。他は保育士と教諭職の経験者であるが、その経験を踏まえて困りのある子どもの観察眼を養い、効果のある働きかけを継続して取り組んできた実績がある。忌憚なく情報交換できるのが職員の向上心を高めている。	○子どもだけではなく、保護者一人一人への声かけを密にして、リアルタイムで子育てに関する悩みや困りを傾聴し、療育を通して見立てた個々の子どもの課題を共有し、保護者の気づいていない子どもの長所や特性を具体的に説明している。「どんな療育をしているか」ではなく、「なぜ、この活動をしているのか、ねらいは何か？」を説くようにしている。	○療育の専門家はもとより小学校に進学した先輩保護者の汗と涙の実践例を聞く会などを充実させて、子ども・保護者・職員のネットワークを一層拡充させ、事業所命名の趣旨通り、分かり合えてよかった!とハイタッチしあえる人間関係の質を高めるよう努めている。
3	○職員が前職の経験を活かし、保育園・小学校でのカリキュラムを熟知しているので、子ども一人一人が通所する幼稚園・保育園で不調をきたす事由や苦手な活動をイメージして療育プログラムを作成できること、年長児に関しては就学支援シートの記入内容を保護者と密に連携し、幼稚園・保育所との情報交換して、就学先の小学校とも情報交換に望むことができる。		

	事業所の弱み(※) だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	○厚労省や子ども家庭庁、及び京都市担当課から発出される文書や報酬改定に関する規定、及び変更の趣旨を読み取るのに難儀している。文書処理に忙殺され、読み取りと回答に追われると、教材作成に時間を取りにくい。	○左欄に記述した業務を担当できる職員が育つと良いが、人件費の面で雇用困難である。何とかこれらの業務を滞りなく担当できるまでは若干の時間が必要である。	○我々自身が改善に向けて取り組む姿勢の根底に、「子どもから学び、こどものために学ぶ」と同時に、「保護者から学び、保護者のために学び、保護者のために学ぶ」という自覚が必要。決して独りよがりの押しつけがましい働きかけにならないように留意する。
2	○療育の専門性が希薄であることは否めない。保育士や教諭としての専門性と経験で事足りると安穩とすることなく、療育に関する研修に積極的に参加して、個々の学びを集団の学びと拡充する研修会の運営に留意する。	○実績のある事業所の実践から学ぶ姿勢で、より広く、より深い視点で情報収集して力をつけたい。その際、保護者の知りたい・学びたいという視点からずれることなく、事業所職員からの押しつけとならないよう留意する。	○改善に向けての心構えは「子どもの最善を尽くす」という精神の具体化だと考える。「子どもにとって」より良いものにするための具体的な糸口は何かという視点で療育の専門性を高める方策を探る手立てを検索する事業所ない研修に尽力したい。
3			